

# 相生集

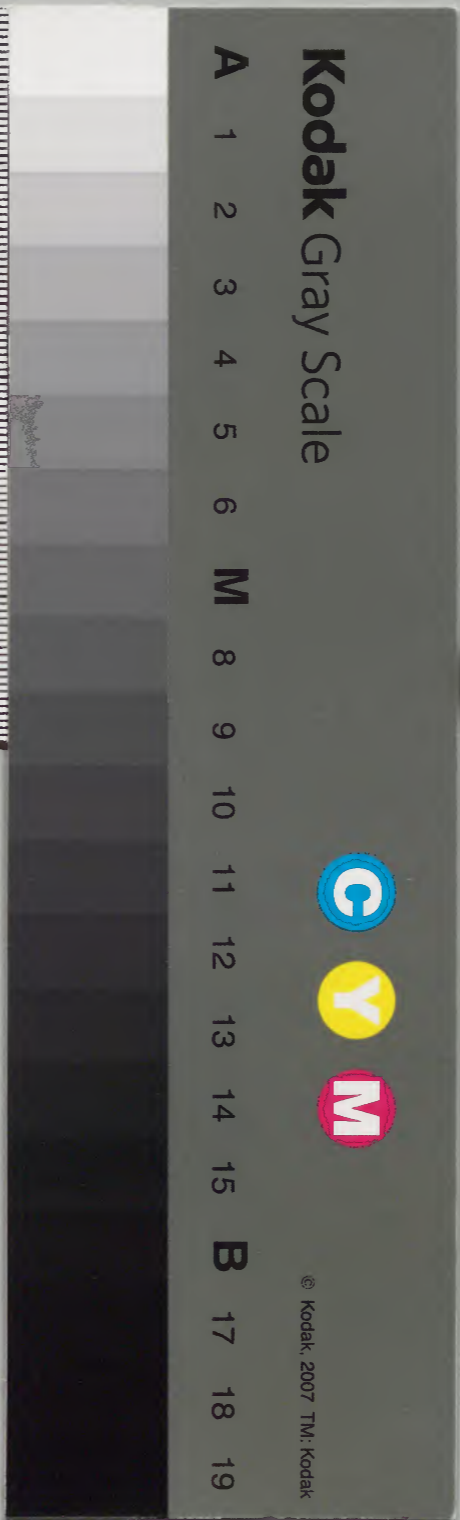
十五土宜  
十六人物

和書門類			
三	六	五	一
三	號	一	函
二	架	四	冊
一	冊	〇	

內閣文庫		和書類
三	大	五
三	號	一
〇	冊	一
二	架	四
三	函	五

內閣文庫	
番號	和 36513
冊數	10 ( 8 )
函號	174 318

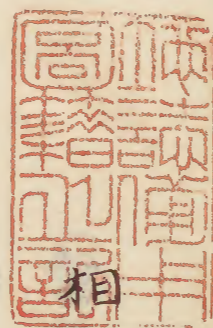
共拾





郡山 箭鏃石  
 日和田 鳧氏 偏葉芦  
 梅沢 藍 笥箕  
 横塚 斑竹

以上國書所載  
 花我部美 吾田太良真弓  
 麻油美紙 安達結  
 土宜類  
 安達真弓 真管  
 埋木



相生集卷之十五

外史

大鏡彌兵衛藤原義鳴輯

片平 貝石

河内 煙管石

安子島 蛙 切金石

大槻 禹餘糧 石英

只野 山椒魚

山口 磨砂

八幡 七ノ木石

川田 空青

鍋山 大豆石

富岡 貝石

青田 紫葦

羽瀨石 曆

石筵 木葉石 炭

高玉 石墨 櫻川石 方金砂

中山 炭

白岩 白岩石 寒水石

松沢 多葉粉

稻澤 菌 雲母 水晶

玉井 燧石 福壽草

深堀 硫黃 湯ノ花 氷餅 石英

箕輪 大一禹糧

桐山 松茸

北杉田 榧

南杉田 温石

府下六町

龜谷 燧鏡 果子

澁川 白石

塩沢 辰砂 熊谷草

鷲草

上川 楮紙 席

沼袋 卷柏

小濱 蛭石

平石 土段藥

内木幡 榧

田澤 璞

山木屋 五味子

上太田 香爐灰

總計六十四種此本小入、

土産類

花我都美

菖蒲 杜若

安積沼小生る菖蒲はくせ草又説ありくはり室方新居の五月  
 五日小くは氏に作て菖蒲の替て刺々草をせむけりて  
 菖の事といひ河ひくは花さくハ田宗草或ハ和草又所謂  
 類といふものあり或ハ花形藻といふものありちといひて  
 衆説いふもや月以て文といふも長々ねハハ皆義明の別記カミ花  
ハハ勝見ハ係る草と稱しやといふ事ありてまうも  
別と明くは若もまうハありて名付たりあり 名付一書又収めたりなり  
 こくハ今ハ世ハ古人考てハ花勝といふもの形と  
 記して同辭ヲ覽ル事也

寫真



壓花



花の色は青なり高麗花やく葉とも花のこたなり  
て千糸の如きはさて尋常のあやめあとの生る葉の  
似つる友路管は花を採つて花箱の秋あきしれども  
大方千糸の艶るることごとく消くひー女と意はるま  
るべしと云ふ花めをあらまひるふささやうりて  
花も葉も僅ふれと出方のさうねは目にはまうりて意情  
と起さしむおとさねも彼の安積の沼よせらあやめの  
一種の色といふ姿といひ佳治窟窟は艶るるあやめさく  
かろへも是と云ふねはは花ささ花つらまはりて

正満ありしやもふおのれたり水戸よりみも世を  
相成りしやもふおのれたり水戸よりみも世を  
うらぬるも一は道草を自文う一石あゆといひた  
じうぬれども是も花の川と稱する事あると一様  
明るもんさふうぬれりてそ流のこりくおれり  
あつらん士田も世はしひき

國歌所詠

領知しん

よみ人知しん

古今  
隆興が安穩の流の花うみ四月よりくふをわらん

花

以勝見再出 梗名

花うみ四月よりくふをわらん

室勝田天皇院隆子及安穩流書たるを

雅經

歌遠云々 新古今

うつろふき 神中 うつろ 候園奇松 うつろ 素山抄 花うみ 信濃抄

花うみ 原姫草 あやめ草 義経伝にさうの うつろふき 幸甲のり要云

花うみ たのまより 花うみ 秋の庭を 四月 長門集

りつみ 其細かふし初更うらむもや迫ふる六月の月の身と花うみをいふと

吾田多良夫 あたらら山の中あり

惟古の来りく良ると割りしとらり次母りしべ

國哥所詠

万葉七

陸奥之<sup>アホ</sup>吾田多良真弓著<sup>ラニニミ</sup>繚而引者<sup>ラニカバ</sup>香人之<sup>ヒト</sup>吾乎<sup>コト</sup>夏<sup>ナツ</sup>將成

譬喻哥

陸奥乃久能安太多良末由美波<sup>ハジキカキテマラシ</sup>自伎<sup>ミ</sup>於伎<sup>カ</sup>低西良思馬

伎<sup>キ</sup>那婆都良波可馬可毛<sup>ナハツラツカメカモ</sup>

國書所載

安達真弓 又白真弓安達の原ニアリ

是も古弓材日あくらる之真淵う古今考ま弓とそ  
ふより弓の出もハタミ一とあり用明天皇二年聖徳  
太子守屋大臣と鐵弓ひし時ハ世あらゆくと用とせし  
ゆりそ弓今も大和法隆寺に納じら<sup>△</sup>

世ハハもハ浅者乃活又刈草のうらもりもはるるうられ

後古今伝 園白系在太長系百有見意 今上御製

勢と六あさこの活とあまもやわらみあうと神の如うん

百首歌をりりら時詠 為氏

後古今伝 刈てるハ浅者の活乃草はとうつとた申とそらあらうらる



類知らん

権中納言公雄

同

花うみつ川まで暮れたる月もいふ安積の川のありさういふを

立掃内侍

更本館

花うみつ川より暮れたる鳥の安積の川より暮れたる初日もいふ

完勝曰天皇院名不似藤子 後鳥羽院

同

葉もけしつらう花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

信實朝臣

同

花うみつ川より暮れたる風も暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

定衡

建保百首

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

同

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

後感つ女

同

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

忠定

同

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

知家

同

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

範宗

同

花うみつ川より暮れたる花の暮らうみつ川より暮れたるあくる初日

範宗

村とのは何もいふ名もふと名もくとは扇風の画に

うせりて あさうたは 名こそこの国 源佐明の古

後後持遠良 あさうたは 名こそこの国 ちうらみわりのくくくくくくくくくくくくくくくくく

名不百首 順徳院所製

人かあさうたはのうとあさうたあさうたあさうたあさうた

建保三年名不百首和奇 定家

拾遺愚草 ちうらみわりのくくくくくくくくくくくくくくくくく

後頼朝の古

家集 喜駒とあさうたはあさうたあさうたあさうたあさうたあさうた

大進

永之百首

いふきんあさうたはあさうたあさうたあさうたあさうたあさうた

袖中抄

陰翳の安核の江は花の月とあさうたあさうたあさうたあさうた

千載

五月の浅き花の江の花うとあさうたあさうたあさうたあさうた

散本集

鴨のわら玉はあさうたあさうたあさうたあさうたあさうたあさうた

夏はあさうたあさうたあさうたあさうたあさうたあさうたあさうた

慈真

松玉

東路やあさうたあさうたあさうたあさうたあさうたあさうたあさうた

あやめ草の根をいふは安後の根とせむ  
是とてあり末のハ世傳とのまじりしとてこの根は  
幸とらるれハあり

以下葉草と云みたるはうゝ固ふりあり

郁芳門院根合をいふはあやめ草をいふ

合葉草  
あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

定家

唐古今良  
あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

徳寺中少

定家

別唐古今良  
あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

名不百首

伊つぬきし浅者の根をいふは安後の根とせむ

定家

全

根と深く我こそよひ人をあやめ草の根とせむ

家隆

建保二年名不百首

あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

貞應二年名不百首

あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

氏初ハ孝家卿

右近少将

あやめ草の根をいふは安後の根とせむ

小大君

尋来一あるは新江の町にありては計りて海くそ色  
にやあなる様う羨まきなりけり女務の治法而りたれ

堀川百首

花うらみ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

國書所載

花うらみ

廣世記

花うらみ

八雲所抄陸奥國  
女務の治法なり

花うらみ

故事談

△  
くしき寺法縁記に云く阿闍志少可相傳北地往古出  
良弓而或備朝貢或用兵家且夫和哥者流徃々詠之此物

此奥之情可視於實方之哥則實見寄此物也但今不聞制  
之者為尤可惜刹郷俗絶無說其甚實者可謂遺恨也一説  
曰古來稱之者非良弓之義原上有白檀樹枯槁已久如今  
化為石猶存焉且古人直為樹而讀来者亦多故未篇拳以  
備参考云又云吾田多良真弓安達真弓元同郷所出也未  
知孰是同書小又いつらく按白檀郷老説如斯怪其妄誕  
若實然則光俊寺詠紅葉零落之句可謂非乎蓋曩昔之喬  
木化為石乎外國亦多此類且夫詳哥句及實方弁内侍左  
近曲侍等所言則真為郷里所出之良弓為想夫白檀亦造  
弓之木乎未可知俟識者可弁之ト云いつらく按白檀の化

多石と銘ありしと云ふ俗説を其時ありやと云ふ今も  
 其事と云ふ石とありしと云ふことなす時若たらむの  
 漢言ぬらし白馬弓と云ふと云ふ乃其の形多むは  
 布皮の白多て之ゆふありぬるも移りて其を其と  
 云ふ之はく弓材と云ふは俗に以て馬也  
漢名 衛不術牙尊本を其  
藏小術牙品類多其の  
一校小矢の羽ありしを矢名馬也  
一名二名と云ふと云ふありし 又似く別あり俗に是と云ふ弓と  
漢名 未詳 系を漢牙又比と云ふは其のて其體を以て同  
 勁強弓と云ふは其の也  
友崎篇に其やく其系  
ゆたなりあり用ゆ 今も其處なら  
 古中其也其也  
安達系は古水陸の二田とありし一は其地たり  
一は其地ありし其處其地を其の地なり其地は其地  
其地は其地なり其地は其地なり其地は其地なり  
古今の分は其處のありしと云ふなり其地は其地なり其地は其地なり 是と云ふは其地なり

多弓と銘ありしと云ふは其の也  
 弓材也とありたりは万葉ニ外尔見檀丘云、兵庫式ニ  
 梓弓一張 長七尺六寸  
楓柘檀准此 続紀ニ但馬國檀弓百枚杯アリテ古代既ニ  
 其例ありといふこと其草部の説小弓と云ふこと其檀弓  
 草部云其藏小和産不知其ハギ一名云ニ其也といふ其を  
 系ありイボタノ葉也似て形似びつなりして長サ一寸なり其  
 小判のやくありありなり其はく其はく其はく其はく其はく其はく  
 削テ葉如枸杞而大二薄し殊冬落ツ花ハニニ三ノコトニ長大是  
 二三其別種と云ふこと其也と云ふ二三其訓ありしなりと云ふ其類の

同くさあふ二五三ヲ以て檀木也やより一ぬらぐ一毛詩多  
識俚解也服の大方 毛詩傳小彊韞乃木と正義曰檀材可  
以為車故曰彊韞之木彊韞とともぬらりて真弓と認る  
うとあり行は檀木は不韞多くしてまると皆堅厚の  
木ぬらりやるといふは月ゆみもまゆも色皆于一種外  
より混したるぬらあ〜う深く尋ぬ〜

國歌所詠

弓と弓のあは

古今大分所行  
みらわくはあはちのま弓我月うは未さよりこまのひくふ  
小一糸右太ねふらりう給とくまを海とる

重之朝臣

後拾遺

みらわくはあはちのま弓我月として君ぬ我身とも名つら  
後く一糸右太ねふらりう給とくまを海とる

有原実方

同

三代之くはあはちのま弓君もこそ思ひたぬあはちのま  
室治百首奇なりうら付寄弓意

兼内侍

後拾遺

陸奥乃也直はま弓末遠りあはぬ方ゆも引くはうぬ

三條院藏人左近

凡雅志

是や叶あはちのま弓今やことおわしたぬあふともひくらぬ

常明寺入道抄改家十首の終合二同を

後堀河院式部卿典侍

新拾遺

人とりくあたりのまろ押之ーくろのまを伊くまのま

中国壁門院但馬

同

今とた、安達の子ろ月をゆもくくもくく路のなをま

中国入道若大改若

同

我なりひくありありもたのまけあはのまろあまーく

室勝屋大虎名若山藤子

家隆

初人の安達の子ろまゆくみろまや小男 あまをま

与み人ま

拾遺

みろのくは安達系力白まろくろくろくもえゆふま

は秋葉盛集はひまろ木つ道ま

くろのくは安達系力白まろ心ほくもーとあり

安達をえ安積の内まろくろく考証ま

家隆

名不百首

まのふのあまろまろ白まろ月まやゆくま

忠定

建深百首

安達のをまろまろ初人の引まろまろま

正平十一年北畠大納言守親奥州國司二任ス爰ニ於テ

白川彈正少弼ト合戦守親和哥ヲ詠ス

梅雲記

三つりのくの安達乃より吾とめてそち一つぬ名とふふは

樹ヲヨメルハ

字治若大改右白川にて見ゆ宮といふ事と

堀川右大臣

洞夜意

関のゆるくぬこころやみらのくぬ安達乃よりあまーゆや

法平寺遍

動捨透冬

かひややとや七十五三らのくぬあらのま弓まよあふよ

彌後之屋ねよ

後後拾遺秋

名こりあり安道系乃あね木まゆみりり比のさひ

正之屋家衛卿

建保三年名不百首

同

時雨あらしのまの白き弓まよと世系とあてぬん

新二帖

ねきりりたる川とぬあらのま弓とほく時ぬさる

芝原右兵衛

名不百首

きりりりあやとぬとらぬあらのま弓まよ隣と

定家

同

あまき今ぬあらのまのまゆあててわくぬとらたぬん

順徳院

家集

くささのあまのま弓り替てまほく秋まありまらりこれ

為家

鳥羽



孝臣集

夫らちる安直の志とふんはけてるを立尋らむつの人  
地外夫らの言あましくもなほなほとてんを  
あふはらしてたり

國書所載

真弓

藤塩草

真弓

ちりま弓も  
秋の存在

真菅

安達ノ原ニあり

夫らちる菅は事

まことちりま弓も  
真弓志砂志家

けろと今の

世に夫菅ありとて人のわくこやさふハ只乃菅  
那ハハを實ら何とてんその日や義情をくけらる  
あふはらしてたり人母尋ねてしもあふはらしてたり

但大和草に菅<sup>キスゲ</sup>とてんとのとふをてあふはらして  
あふはらして菅草は少くはく草葉と解あり是は里と  
あふはらして菅とてんとのとふをてあふはらして  
今の夫菅とてんとのとふをてあふはらして  
書くさふとけと假定は書きたるとさつと貴とあふはらして  
似たりとてんとのとふをてあふはらして  
そふはらしてあふはらしてあふはらして  
あふはらしてあふはらしてあふはらして  
あふはらしてあふはらしてあふはらして

國歌所録

名寄

あたらしの世傳の志後崩れなりといふ物の名を記す

生駒

後徳大寺

惠宗法師

安達の中津江少解より志後崩れより小寺橋あり

國書所載

菅 秋の森

麻油美紙

是列の紙は紙のよきものばかりなりはもて作らるる紙はよき紙なり  
紙といふものの名産なりは陸奥紙といふものなり  
今も檀のよきと書くありはたゞ今も檀のよきと書くありはたゞ今も檀のよきと書くあり

あたらしの世傳の志後崩れなりといふ物の名を記す  
生駒  
後徳大寺  
惠宗法師  
安達の中津江少解より志後崩れより小寺橋あり  
國書所載  
菅 秋の森  
麻油美紙  
是列の紙は紙のよきものばかりなりはもて作らるる紙はよき紙なり  
紙といふものの名産なりは陸奥紙といふものなり  
今も檀のよきと書くありはたゞ今も檀のよきと書くあり  
あたらしの世傳の志後崩れなりといふ物の名を記す  
生駒  
後徳大寺  
惠宗法師  
安達の中津江少解より志後崩れより小寺橋あり  
國書所載  
菅 秋の森  
麻油美紙  
是列の紙は紙のよきものばかりなりはもて作らるる紙はよき紙なり  
紙といふものの名産なりは陸奥紙といふものなり  
今も檀のよきと書くありはたゞ今も檀のよきと書くあり



埋木

本里及所管河川之産以霜憂翁云三代實録二貞  
觀十一年陸奥大地震海口哮吼驚濤洑漲原野道路總  
為滄溟山林巨樹埋河とありふりふり川の埋木も此時力  
也やとりの義清三代実録とくろり同年月廿六日金葉の  
下ニ陸奥國地大震動流光如畫隱映頃之人民叫呼伏不  
能起或屋仆壓死或地裂埋殮馬牛駭走或相昇踏城郭倉  
庫門櫓牆壁顛落顛覆不知其數海口哮吼声似雷霆驚濤  
涌潮洑洑漲長忽至城下去海數千里浩々不辨其涯溪原  
野道路總為滄溟乘船不遑登山難及溺死千計資産苗稼

殆無子遺為とらとらとら林云く文ふーいりあり得る  
也やとりの義清三代実録とくろり同年月廿六日金葉の  
下ニ陸奥國地大震動流光如畫隱映頃之人民叫呼伏不  
能起或屋仆壓死或地裂埋殮馬牛駭走或相昇踏城郭倉  
庫門櫓牆壁顛落顛覆不知其數海口哮吼声似雷霆驚濤  
涌潮洑洑漲長忽至城下去海數千里浩々不辨其涯溪原  
野道路總為滄溟乘船不遑登山難及溺死千計資産苗稼

國歌所詠

いづれふりりるるは日やいとあひやうて

重之

後拾遺歌

まゝ毎々忘らさるるに堪ふ花乃初とおもひこやと

最勝曰天皇院降子と遠限川書たる事

家隆

新古今和歌

君う代々あふり川乃埋木も此の時とるるを待たり

史本系

源之秋遠隈川系付雨れてとこことと之ぬ瀬ノ埋木

義晴之りく重之船片乃奇とあるり川よりとせ

如多道元くくもくもくもくあり因又く小録一川

國書所載

埋木 秋の森芝

郡山

箭鏃石

滴釜清水之邊ニ有リ  
八幡駒屋川田等亦産ナリ

此石乃生るる地邦外もつあり因又く小録一川

続日本後紀承和六年十月乙丑之下ニ出羽國言去八月

廿九日菅田川郡司解備此郡西濱達府之程五十四里本

無石而後月三日霜無止雷電聞声經十余日乃見晴天時

向海畔自然隕石其數不少或以鏃或似鋒或白或黑或青

或赤凡厥體銳皆向西莖則向東詞于故老所未曾見國司

高量此濱沙地而徑寸之石自古無有其所進上兵家之石

數十枚收之外記局云云三代實錄元慶八年九月廿九日

丙戌之下出羽國司言今年六月廿六日焮田城雷雨晦冥

雨石鏃廿三枚云云同七月二日飽海郡海濱雨石似鏃其

鋒皆向南云云

和漢三才圖會出羽國飽海郡大物忌神之條ニ凡一年一

度降鏃有暴風雷震天氣常異人以此為之神軍後圭樹下

有系系之

尋求之有鏃降形鎬矢養股等數品而非鉄非石未知何物  
中畧 陸奥能登亦有降畿内及山陽之地則未曾有此物也  
云云

聞老志云神鏃石在白石館腰地俗説曰山神相戰所射鏃  
也故曰神鏃云云

里人談小云常川麻嶋みもりの依濱不麻状明神毎年二月  
九日大雨風ゆして夜よ入く大ふあり四方より志つまり翌日  
極うく晴天あり事例年たつと依古俗を教と神事ありと  
い傳へて戸出とをいこありり此の日社名のをいぬりさの  
多根相あり其多ありまの編をささくの形ゆして大さほ

常乃多根の如し

雲根志度編と紀列然野海をゆて録とあるそ縣の皮肉の石  
礫石あり又徳園もて大風毎のら山嵐振し多る山は  
古井あり支或ハ雷の落し跡あり河本は産たり元朝は  
色形むしりしるく山越奇蹟はさ北越新く山中藤々  
古き社地古城跡の如しと母とあり勁城跡の六光寺  
村山畑神田山二島初六系浮湖水の山系ヶ入村渡辺  
村長名忌竹森乃村古き社地あり名中ぬ古法中より  
花放つて竹木小 なる事ありし蒲生郡に有し伊藤氏  
山下禁村の畑尾流乃古城跡等又兼山西よ古庭村海邊

山間の小池あり其地甚多一又社地あり其地中より  
放く人よりいふ事もありと放て損傷より其地又  
任州境國山の中めて農家の婦人あり其地湯一  
あり其地中よりいふことあり其地湯一  
中より入あり其地湯一其地湯一其地湯一  
根深り七寸計りあり其地湯一

義鳴りて其地邦より産する瀝石は皆此地湯の事  
ありてゆる事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
只東鄙草は瀝石八幡村といふ事あり其地湯の事  
神軍あり其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事

日六

其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
小くして瀝の用とする事あり其地湯の事  
彼者神軍あり其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
雷斧の類あり其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事  
其地湯の事とせん其地湯の事とせん其地湯の事

凝結して石質一念と只凝と磨て欲日對せんとんを  
石と穿く忽此形をるんをとりり皆受籠しと云  
石備又蒸凝石とあるは同一く只一種の石なるを  
手形と云く名付たるをいふともいふは大地中に生る  
この木より草より道路陽の氣も遠くにて自然  
手形とるんのみならず凝石も限りてわづ理ありん  
やとを誰も知る事ありんをいふは又雷換雷各  
せしころもの手形異なりて凝石の同種と云はる  
ものありん

日和田

鳥氏

イモ

日原女之らくは村湯抱師多て凡て地列六

戸敷定りありんをとり野列六戸は戸女戸抱師の類  
日和田定ぬるありん或は増或は減と云く苦く可く以  
とくは從ふりし重武帝の御宇奈良東大寺の屋と湯  
り村列の湯工ありんをい鑄換して遠くはれり此割  
日和田乃湯工系師見物なりと云くは事と云あり古事  
術ありと云く容くありんをいなりと云くは成就の  
はちと云くは乃ち更賦は彼多ふ合は彼多内陰小砂と云  
手砂の量と云くは洞の量と計り唯一湯ありて産成り  
ははく日本第一の秘ありて産の流小陸奥國安積郡  
和田之住人と云くありて姓名ありと云くは亮神也



ありきんといふなりを流す四十一年も大板村迄と云ふなり  
しふとそふ遊て美香と記とすしとあり義晴うまたるを  
此大佛の供養と流るやふと云ふは奇世の供養なりと云ふは評  
備より流しつゝ洞と若あふいして流石と云ふ又の日流形  
と能く習てその流るり又名のやしくいふ所をそ共いふれぬ  
あされ居ると彼の村に隣匠ら名のみやくりいふやう  
流と流りいふそ形流まりぬ池をううら洞と流し入る  
り流るる流る水と云ふ入道しそ形小のそ流る洞  
火の勢減らるうぬぬ形と裂事ありと云ふて遠くその  
鐘と鑄成たりたりくそ巧ありぬ成りたりと云ふ今の  
か

鑄物師と云ふ孫なりといふり

偏葉葦カタハ 安積沼旧地ニ産と

こを騰海なるうヒメガ蛭蛇湖のな事と移さぬ似てあつた  
か

梅澤 藍アヲ 笥カ 之福乃ひぬいとも作り出さしといふ田向

横塚 班竹トラフ 私名抄ニ一名溪竹波ハナ遅チ久とあり今如く大和

本草ニ延ふ漳州府志ニ云節間有班文似湘妃淚痕所余者  
云、○大平村亦是此産と

片平 貝石 額取山ニ有り 義晴過し以去人しては石と云ふ也  
あうぬ一ツハ蛤一ツと別ぬ似くまぬ迫りては海島古伝と

今と貝の生うらありて貝原氏と混沈未だ前の海ぬる  
あつといふれいといふるは但おのこつたつたつ  
そ内蛤ぬ蛤ありといふるをかく化せたるをいふて少く  
口と開いたるうす中ハ柱と相合たるものやいふこと  
彼よりうすも是れ同いふより化せたるものと云ふ海なる  
と云ふはふふん富翁難活ぬ相色寺の付おぬるとい  
敷ふをそとてうす女雀の蛤ぬ成たるを敷十とありてうす同花  
はとの柄と月令雀入大水為蛤と云ふぬといふこと目ふと云ふ  
初ことあつてうす事いふいふに化せ和漢之や同會をと云ふ  
ぬふぬ阿波備後小石蛤ありて状を蛤ぬ似く同けと云ふの

如く固く相列是柄らぬと云ふ類ありといふことと云ふ阿波  
たとの石蛤といふもの別ありといふことと云ふ同くは  
こハ一程の貝石ぬく化石ぬありてはるべし

**河内**

煙管石 醫真山下氏の蔵と云ふことと云ふ

あつた地力やうぬくまういふ漢名ありては  
ら野系産

**安子**

あつたりぬ産するものありてはるべし  
はくともいふは小粒のやい梅と云ふ折小井と云ふ  
ほとり事こととやうある事と云ふことと云ふ人云く  
とらると只つらと云ふことと云ふことと云ふこと



一曰滝乳石とあるを此之山口村亦産之

**只野**

鯉 五丈堰と越て半過さるり少く平らなる水流れ

ゆるゆる山椒葉といふものなり鱒魚ハ鮎魚似て身ハ赤

赤如し性寒の人指して瘧疾と消しとるり少く生れし

香たるとくく和漢ニヤ同今ハ鯉と山椒葉といふなり

ゆく本草と訂て肉甘して有毒といふなり 富翁 難陀 深堀村亦産

なり

**山口**

磨沙

**八幡**

セノ木石

此石なり

雲根

此外亦く小産す

**川田**

空青

一名曾青といふ似有ハ空青ノ最大なり

大和 相原

天工図物ハ空青既取内質其ハ升折為曾青といふり則り  
緑青ハ一物也

**鍋山**

大豆石 大豆塩有り

雲根志後編ニ大和國豆坂同小字

多山伊豆丹波多ありといふ豆石の類なり

**富岡**

貝石 翁ノ有付為司郡巡村して邑小なれり村民ノ

半産といふ百世先年奥山溪谷ノ間ニ得一奇石其石

銜螺蚌殼と強しりハ亦隔海邊事数十里ありて螺蚌の殼

於附あり石の形もさうなり所謂桑田愛海邊大行而北崖

之間往ハ銜螺蚌殼及石子如鳥卵者横且石壁如帶此乃昔之

海濱今東距海已近千里所謂大陸者皆濁泥所湮耳といふ

事とのとあり中華ありあり事とるあり 富翁  
雜話

**青田**

ハツクダ 紫草 啓益按殊来生山野松樹下味甘美無毒可食其裏見緑青色者好此物性味輕而病人不思志米知奈須之幾初茸三種菌中之佳邑也 卷懐  
食鏡 此外所ニ産ス

**羽瀨石**

曆 本邑の民橋本甚古橋つとりよもの天和三年に作り曆のちりご一とふたりとふたりとて今もその原今も是の彼ハ毎年作り出さる北裏堂  
ヲ羊記 今を奉とるあり可憐とて此甚古橋つとのり舎深ふ移り居て今の舎深曆といふものの子孫の作り出さるると土田の記ありてこの図も

首ニ奥州安達郡二本松橋本甚古橋の二本と題し次々申限の

解り書たり天和三年癸亥之曆也

吉書始 正月大建 甲寅

日	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
				みつ日		みつ日	みつ日	みつ日		立春正月セツ		五分半子ノ初刻ヨリ同八刻迄	下ケニ
	一日きのりたつ												

天和二年十二月朔

吉成謹勸之

末畧石と通之末女豆夜乃短ひと集く初らしよの表紙ふ  
水火本金古乃り根江流品と題り末の表紙ふ日本興地  
園と出たり手品年代記等々あふ品乃り

**石筵**

木葉石 文理ふあふ事木葉を壓たるものこと  
雲根志は化石なることあり大和草草の荒紋石乃  
類わらべことあり手品村亦産す

**炭**

外産す

**高玉**

石炭 富翁雜話卷一ふ玉村乃小川流たるよ流りて  
高玉の腰を親者の岩屋有り世知たよ難て所板と  
く高玉と出たり里人穿ら而て高玉の習り用る

高玉予世と有く試之る高玉黒く清潔なありぬもの  
有りて難たら和石乃野々ありありハ勝て是れ高玉  
初ら科より出せらふ高玉事ふこと高玉大石の  
淨地より石筵と出せらふ高玉事ふこと高玉大石の類あり  
高玉ことあり村版とと高玉平頭天主の社後より出たり  
高玉より出せ事なること高玉科親者の後より石筵と  
出せ事ハ大和草草雲根志高玉と申すこと高玉折ねり  
石筵と石 石筵の如きこと書しそのあまは似たり  
列相あり

**櫻川石**

荒戸海より出せ 硯不用ゆり高玉格高流不次く

高玉科新  
活二小巻

あるものハ至 七葉水酒や飲して不仕とて  
山脈より産て幸之しく漢流に沈没するもの多し

葉及雲根志後編又梅川石を

若ぬと班文あり規小用ひてと糸と似とある正しく是れ也

種一この梅川石と呼ぶれ幸ハ大概記及之也

方金石 熱海漢流の  
例より産る 金色のふくく角あり石なり方解石の類

田同  
漫添

中山 蕨 うくと山本屋村と云産するもの例例葉

幕府日劔らううううう巻懐食鏡ニ **主治** 去暴熱利水道令

人眠補五藏不足壅經絡 **禁忌** 久服令人目暗鼻塞髮落又

冷氣人多腹脹小兒食為脚弱啟益按此物病人禁勿食瘡

家金瘡痘疹後不可食云々 此外所産ス

白岩 白岩石 嶽山ニ有リ 其質燧石の如く也て甚く白く漢名

未考是則材名の起る處なり 宛着後風を元小く古名は小白砂アリ大石なりと  
此物と云研て砂と云は鮮白なりて是れ一と

いりこの白岩と  
より同相なるを

寒水石 水晶の如く垣然にひりのやく白くもなてやうう

そのを源と垣の積之薬店にて方解石と云やうる 雲根志  
葉編

松沢 相思草 多葉粉の説いと多し大概氏之著録やうる

そのよりうる 按本種日記ふららのくふも田代たも

仙東白石とくありきい今とけいしうより出る葉と

江戸日と概して仙臺葉と稱する事ハ白石といひと

此の如くより出るたるともまじりてある人かめけけ外  
本幅多く産すと

**稻澤**

菌 ともてい村菌多し 此亦よく産すと

**雲母**

本草云雲母 和名伎良 五色貝 謂之雲華 多赤謂之雲珠 多青謂

之雲英 多白謂之雲液 多黃謂之雲沙 和名 龜谷街切通し

亦産と

水晶 邑人此村より水晶の有り山と見付て掘りぬる色

黒光り形は六角みく長二三尺斗り徑寸余もあると云

是れ鳥水晶といふものありし 富前 難所

水晶梵語ニ頗黎といひ天ニ風物も凡水晶出深山穴内瀑

流石罅之中水経 晶流出晝夜不断出洞門半里計其面尚

如油珠滾沸 凡水晶未離穴時如棉軟見風方堅硬琢工得

宣者就山穴成粗瑛然後持歸加切省刀十倍云といひる

之の如くや知ると小産行る多し

**玉井**

燧石 番倉山より出る其外山木屋 火打坂と云ふ亦産す

福壽草 在名倉山

大和本草にフソク草とも之日草といひてあり或書ふ

漢名未詳 本草家鏡子桂海志よりとり 創令蓋し

その多しあはれと禁中秘録の報云とある

是又何よりて名月多しと云ふとあり 近岡富華の



季冬及初春開異花人盆種以為節物刘桂山醫官謂紀昀  
滌陽消夏錄所云雪蓮或是未知的否聞蝦夷地方此草極  
多又有紫花者未得致其種後閱西域聞見錄雪山北路雪  
蓮最多雖不載形狀為此草可知知矣と云ゆ本幅に安達  
太良山ちと亦産と

**深堀**

硫異 安達太良山ヨリ出ル 湯之花同シク

氷簪 幕府に例年まうししうそのを是地ゆくり製せり  
ちたり江戸の薬匠福徳仁左衛門より製せりて試  
しりぬ池の乃ふまふとありと云ふゆくりと云ふ  
石英 吾ゆららの谷中ぬあまて長松丈余周匝一丈あり

あり人子よぬ登りて伸屈自在なる也と云ひ從者  
二人山中入りてたゆみとありと云ふゆくりと云ふ  
ゆくりと云ふゆくりと云ふゆくりと云ふゆくりと云ふ  
実と伝吏初の管下也といふ人あり或云ふゆくりと云ふ  
二六稜如削無小豊殺其色深黒如漆直立兩間末与峯齋實  
奇矣余則謂是黒石英極瑣瑣者也因問之道者則云未聞  
其名當在缺屋東北人不至之地余亦不能強之觀止矣と  
いふ是なりこけ金裁翁名ありと云ふゆくりと云ふゆくり  
ゆくりの記なり

**箕輪**

大一禹糧三雄山ニテリ 其形をみぬ以たるゆくりと云ふ

石といふ或人そ一禹種ありと云ふなり左一禹種ハ禹余糧の  
一種なり

**桐山**

松茸 象目田山小産と 本綿布より小茸乃白ハ炭礫

おとくはと系知りの山野川拾穂と養うと云ふと書きたるを  
亦く採ると云ひたるなりんハ外亦く小産ハ巻懐食後ハ松茸性

平味甘無毒甚香美木茸中第一也云々

**北杉田**

榧實 光恩寺ニアリ 左榧といふものことと

**南杉田**

温石 桑師ハニアリ 不難他ハ比と云ふハ云ふも

山東通志曰出掖縣色兼青白潤膩如珠日無毒可備藥物  
日本温石ト云モノアリ白クシテ少青シヤハラカ也 是山東

通志ニルセル中華ノ温石ト同物ナルベシ冬ハ弓ノ弦折シ安シ温  
石之末ヲ指ニツケテ弦ヲシユクニ柔靱ナルヲ夏月ノ如シ是温石之  
性熱ナルヲ可知温石ヤイテ塩水ヲソ、キテ布ニ包ニ痛處ヲ慰  
スニ尤ヨシ又腹中ノ積滯ヲ散ス 大和本草

府下六町

**龜谷**

燧鏢 葉と印と云ふハ治工乃祖乃叙家菊一文書の

弟子ぬりしハ有りてありと云ふと云ふと天保四年といふ  
炭礫乃所納より菊の紋と勅許ありて毎年治工を人たり  
燧鏢を先貢くべしとの旨旨と云ふこと古代より  
名産めく本綿布 室町六年 本産 といふ冊湯飯の素階の性来



葉のゆくまゝあり葉の少くまゝあり葉の多しハ九寸  
柄小葉あり花の大き鴨の卵と二月に割たるとり相  
しく形を蛤と二月に割たるとり白く或は黄なり  
むとくくくり乃肉のやくむて黄く花うらとくくくく  
深ふふあま或曰敷盛草と一物くむは葉のうらと敷盛草と  
川小葉の淡白を徳名とるはくま枯やとくくく大和草草に  
くくくく草くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
花ハくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
草如ふべし

鷺草 青白の二種あり花は地衣に移し柱して翌年より花と

石抄とり予試るは然り相模國の事書はふものには浦  
淡めく淡きふ多く生したりとありくくくく右は淡くは  
くくく 移蓮根  
事法

上川サキ 楮紙 大奉中折小科紙皂角紙とくくくく紙多の

法紙と刻名と皂角紙と紙鼻と避んうたふあり富翁雜誌  
ニ云番祖筆記ニ云宗王文憲家以皂莢末置書中以避  
ト是等ニヨレルナルベシ云々下川寄沼袋ナト亦産ス

席 本綿布子乃後小川漆屋店凹たる癖は似りくくく平

石鈴石ナト亦製ス

沼袋 卷柏 本草云卷柏和名伊波久美一二伊波古久  
和名抄

西嶽亦産ス

**小瀨**

蛭石 塩松ノ邊ニアリ 土箱よりふるりぬく小て火を  
投るとぬいぬらしり伸信して色も形もよき及生たる蛭石の  
如しぬふ名あり漢名河とゆふ也此石地軒片なりと稱ふこ  
ろにて雲根志ニ編みし出ると兼きたるを只同志ニ春のふこ  
乾燥 大平村子外下く小出と

**平石**

土段薺子 高田津ノ邊ニ出ス 土中ニ産す形山芋或ハ  
薑乃如く安直ゆして長きとあま中を虚わたり実海  
ぬらありと云ふ其味よく女の筒のゆく大根身房の形ある  
とあり 雲根志  
前編 此則土脂液也生干土穴状如段薺子故名云

本草綱目

**内木幡**

榧 本綿布子小名一初木幡力榧の喰て

**田澤**

璞 本村の澁音といふ役勤り一里石橋よりふとあり  
母村中と流る澁流のうらり後田と唱ふ榧力造して是天  
下を是を冷して居あり一の水底に走りたりと云ふ  
即ちさうふもの有りたりありと云ふは土に水垢  
つらぬる石母して走るとも云ふは土に水垢  
えりぬる家に携てうぬりて井の中へ投入りしつ天澄  
月明らぬらぬ水上に浮ら出ると是を曬すといふと  
御着ては底不沈む事一たり清く及煮るのゆめふたり

さめて残像よりして口惜しと事ありて三里右邊の  
直又俗通りをある買ハ初山宿の万蔵院といふ修験の遺俗  
あり持あまはしく齋しものありて玉とねんを  
えぬおこきとてたりし女里右邊のいづるお水垢  
けりまはくきりありておれは洋然たる黒石をて大に  
飯の如く修しこもハ馬さ内又少量の之をけり  
水乃移し日又暎とけりありて日眩と知し  
今も何もしふ事ありて今も信の川とて  
脱け玉とてろく拾ひしものありと云傳るより里心あり

つとみ、  
北慶寺  
筆記

**山木屋**

五味子 蕪敬草註云五味 和名作祢加豆良 皮肉甘酸核中辛苦

都有鹹味故名五味也 和名抄

**上木田**

香爐灰

會津領之時本城山ヨリ出ス今其地畑トナリテ灰ニ純  
タリトソ 本文

相生集卷之十六

人物類

補任

比止禰命

繼足

繼守

今繼

清吉

押广吕

久麻直

大庭

山守

静广公

東广吕

月广吕

和哥

采女

恒忠女

高國

外史

大鏡彌兵衛藤原義鳴輯

豪族

虎丸長者

文學

親盛  
希夷  
建達

賴直  
易學

利容

數學

吉德  
附渡辺治右衛

諸礼

寶長

鑿學

說夫  
伯敬

俳人

尚茂

好畫

敏義

武技

高就

負家  
重明  
附門馬市右衛門

某  
附丹羽八郎右衛門



以下三十三人此冊小収む

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

阿岐國造人物類

補任

比止禰命

阿尺國造也志賀高穴穗朝御世阿岐國造同祖天湯津彦

命十世孫比止禰命定賜國造

旧夏記〇搜古ニ日本紀ニ  
アリトセラレハアマリ

繼足

神護景雲三年三月辛巳安積郡人外從七位下文部直繼

足阿倍安積臣云々

義鳴曰ク文部之姓或ハ文部トヨニ或ハ文字ヲ誤リテ

文部トシタルモノニアリ姓氏錄ニヨルニハセツカベト訓ヘキ

例ナリ童蒙ノ夕メニ云フ

継守

寶龜三年六月丙申陸奥國安積郡人アツキ文部継守等十三人

賜阿部安積臣云々

延曆十年九月辛亥授陸奥國安積郡大領外正八位上阿

部安積臣継守外從五位下以進軍糧也以上續日本紀

今継

清吉

貞觀十二年十二月丙戌安積郡矢田部今継文部清吉等

賜姓阿陸奧臣三代實錄

押廣呂

承和十三年十一月庚子安積郡百姓外初位下柏造子押

廣呂戸一煙改姓為陸奥安達連

續日本紀ニアリトシタルハ誤リナリ

續日本後紀〇戸一烟トハ俗ニ家一竈ト云フカコトシ其例此書ニ多ク見工搜古ニ

久麻直

信夫之國造也志賀高穴穗朝御世阿支國造同祖久志伊

宇命孫久麻直定賜國造日夏紀

大庭

山守

神護景雲二年三月辛巳信夫郡外正六位上文部大庭等

阿部信夫臣信夫郡人外從八位下吉弥候部足山守等七人云、

静戸公

今年今月信夫郡人吉弥候部廣國下毛野静屈云、

宣長カ古事記傳ニ静屈ハ静戸公ヲ誤ル也安達郡ニ静戸郷アリ信夫

トハナレル郡也云、

東戸呂

延暦元年五月乙酉陸奥國人外大初位下安部信夫臣東

戸呂等献軍報並授從五位下 以上續紀

月戸呂

嘉祥元年五月辛未陸奥國信夫郡擬主大田部月戸呂賜

姓阿部陸奥臣 續後紀

和哥

采女

万葉十四

安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國

右哥傳云葛城王遺于陸奥之時國司祗承緩急異甚於時

王意不悅怒色顯面雖設飲食不肯宴樂於是前采女風

流娘子左手捧觴右手持水擊 千蔭ノ以擊の誤 之王膝而詠其

哥尔乃王意解脫樂飲終日 畧解本の假字ハ考ニヨル



おの風流あるうあふつけてあてたきとて王の乞も  
解のつらふふ一は是武紀の太室二年四月陸奥勿負  
との刻之ゆきいそふりうん乞ととひい世書城  
王の文武紀の八年秋七月高城王奔ととらう王の事  
あふんそい 別棟万葉のまゆ万葉考の  
記も大同小異する不抄 ○義晴のつらく親重は  
徳よは兼女片平の産とも必とていひ初より伏せし  
たふねらう一といひり 孫坂のち振 持子知多とねむ義晴安友  
をゆきをそく遊遊したる  
との記よも日本武志の東征の時に妃橘姫とけひひる  
あふ兼女とけより伏せさせとらふねらう一王を  
あふいりう兼女と徳のつらふん世書城の兼女と併ふ太和

らあふりういひりてけり一ねらう一といひりこを  
後く安移らと彼あふありとそんあふてういひり  
さして兼女と少腹の姉妹兼女のさけりうとを正は  
とあふ事あふ六年去して古郷へつら事あふ一  
あふ不兼の兼女といひり一あふん高野のさ兼女  
ひひららと兼の字と兼は兼一やと兼吟う八代集抄  
古今序兼女の歌の記よあふの初司う女とあふ下は道  
とらうの六年さく因返りあふ不兼の兼女といひり  
是則高野の記よ同一具い兼女を兼も有らあふれ  
は彼い兼女乃産あてあふり付とねらうあふりあふ

幸ふらあふぬこ

古今集序はあふら山のまゝをうぬめのたふしよふ  
てき、傍にわつたのあふらみとみらのおくしきん  
したりたはけぬ因り司事ありそつありとてまを  
あつたねとともさあつりくはつねありたる女の  
うらけりてそめりこはしをわらむらふとてま  
る

あふら山影見苦烏山井之浅磨者人乎惟生物歎只 采女  
色葉集は葛城王のそら所國つ下りあふら女或は玉の御承  
所司まうけあらとつふりともく王公まうけはこもふ

うりて采女王の浅磨とあつては歎とらふ女王の  
はなひけて収りぬき

詠歌本紀曰日本武尊子伏日高見國至忍生國皆國首等奉  
饗而為事疏大王不喜色欲物采女春姫知無為而好乃進取  
奉觴奉上文酒調曲謠之大王解情致平均

浅香山影贖見苦烏山井之浅磨者人乎惟生物歎只 采女

案古来以此哥為橋諸兄東行采女之所詠焉古今序亦俞自  
是以来和哥者流及天下後世公然解其夏實母其和哥也然  
今載之本紀而以日本武尊易葛城王以采女春姫而為春觴  
女其夏實其詠哥則同而其人其名則異於是蒙暗惑焉耳

義鳴いらくく一六剛亮志女載て別洞岩の端之實に世鏡  
今昔如く昔より番城王のゆとせーと竹のぬらりて日本成る  
志事と一たるもやのりつり一具ハ惟生<sup>オモフ</sup>終<sup>セ</sup>つもの  
子心とくとのと成知たらぬくうこととりのハ反語を  
別あもよものふおとひつせぬものとしひたらなり  
幸<sup>シ</sup>ふお方の心ゆら之かもと疑の洞又成と同一さふふと  
用れとも反語とや一例もくや一明してよとともいとの  
結<sup>キ</sup>と成<sup>チ</sup>初<sup>ハ</sup>もくらしや奇の母ととづき是別後世を徳の徳  
おふ事う川中<sup>ナカ</sup>に証<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>ことや

大和物語女昔大綱云力まむいとめいたうきほくしとを

とらむり<sup>中</sup>を<sup>畧</sup>うと移り<sup>中</sup>めて有<sup>中</sup>る人<sup>畧</sup>ぬとみく  
馬<sup>ウマ</sup>とよとく陸<sup>リク</sup>奥<sup>オク</sup>つ<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>よ<sup>中</sup>いとく<sup>中</sup>い<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>と<sup>中</sup>いと<sup>中</sup>い<sup>中</sup>迹<sup>中</sup>て<sup>中</sup>ふ<sup>中</sup>る  
あさうは初安積山よりふまぬいかりと移りて女ととて  
里ふいと<sup>中</sup>物<sup>中</sup>た<sup>中</sup>と<sup>中</sup>と<sup>中</sup>め<sup>中</sup>く<sup>中</sup>く<sup>中</sup>を<sup>中</sup>て<sup>中</sup>幸<sup>中</sup>月<sup>中</sup>を<sup>中</sup>燈<sup>中</sup>ん<sup>中</sup>り  
畧<sup>中</sup>女<sup>中</sup>男<sup>中</sup>抱<sup>中</sup>り<sup>中</sup>と<sup>中</sup>り<sup>中</sup>ぬ<sup>中</sup>り<sup>中</sup>て<sup>中</sup>り<sup>中</sup>ぬ<sup>中</sup>ふ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>う<sup>中</sup>何<sup>中</sup>日<sup>中</sup>に<sup>中</sup>い<sup>中</sup>ら<sup>中</sup>ぬ<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>  
降<sup>フ</sup>り<sup>中</sup>ひ<sup>中</sup>て<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>出<sup>中</sup>く<sup>中</sup>山<sup>中</sup>の<sup>中</sup>井<sup>中</sup>の<sup>中</sup>敷<sup>中</sup>と<sup>中</sup>移<sup>中</sup>り<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>ね<sup>中</sup>の<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>い<sup>中</sup>し<sup>中</sup>り<sup>中</sup>  
今<sup>イマ</sup>色<sup>イロ</sup>那<sup>ナ</sup>の<sup>中</sup>畧<sup>中</sup>いと<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>を<sup>中</sup>ぬ<sup>中</sup>り<sup>中</sup>く<sup>中</sup>ね<sup>中</sup>る<sup>中</sup>を<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>の<sup>中</sup>か<sup>中</sup>と<sup>中</sup>い<sup>中</sup>て  
と<sup>ト</sup>み<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>り<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>ふ

浅香山敷はくまむら山<sup>中</sup>の<sup>中</sup>井<sup>中</sup>の<sup>中</sup>浅<sup>中</sup>く<sup>中</sup>い<sup>中</sup>人<sup>中</sup>と<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>の<sup>中</sup>ふ<sup>中</sup>もの<sup>中</sup>ふ  
ま<sup>マ</sup>と<sup>ト</sup>み<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>中</sup>書<sup>中</sup>付<sup>中</sup>て<sup>中</sup>唐<sup>中</sup>の<sup>中</sup>女<sup>中</sup>返<sup>中</sup>り<sup>中</sup>て<sup>中</sup>死<sup>中</sup>ふ<sup>中</sup>なり<sup>中</sup>畧

義晴のてらくこと他相済めくあうこととてふらふらふ年  
序より入りの

恒忠女

大和相済小兼盛みらのあまぐ国院乃其このむとをえり  
ありく人思極より入ふふはるのそむしほりたる  
あをせありは  
みらわくは安達系乃思極女あまのしとてまの  
さひありたるかしてまじとめとわんとていふね  
親まもいひかへらんある今さらへらんわ  
りひまもまふいひとてふねつら

義晴のてらくこととてふらふらふ年  
序より入りの  
あをせありは  
みらわくは安達系乃思極女あまのしとてまの  
さひありたるかしてまじとめとわんとていふね  
親まもいひかへらんある今さらへらんわ  
りひまもまふいひとてふねつら

義晴のてらくこととてふらふらふ年  
二年八月強のち女知一正曆元年十二月辛辛を一人  
たりはふと隆安女あり



君とまゝにそまをあらはるるやあらはるるや  
こゝれり相傳ふもよもよも青洲ふあはれとていふ  
まゝにまゝ

高國

則富山氏めて二本城乃周祖之金虎抄及人武勇一  
長とる乃ふまあゝい愛高の乃をぬまれは代の初撰  
めも和歌の教多くりそとてあり風雅集と撰れ多り時を  
まゝとていふ首たふことあしつる虎の袂りうらるる月影  
新撰古今集初撰の時も昔之虎殿の心養ありやれん  
富士の根にほぬとていふと撰りて我身一つと撰りてぬま

豪族

虎丸長者

何人めていひのいふは後たきん法流とていふ  
皆あつらふまゝとていふ法とていふ事なり昔く法流と  
いふまゝ後人乃是正とていふ  
初ら四事考ふとていふ虎丸といふと上野安齋法伯思と  
大津丹丸抄乃名と照とていふ又とていふの草字とていふ  
あやまりて東夷の酋長と丸とていふや 桓武帝の事代 又文屋海丸  
柏造子押広呂と照り唱ふとていふ且とていふ字とていふ  
文屋再樂と呂とていふ斗樂丸と唱ふとていふ或ハ虎丸と青龍

白虎と名したる城あり是も城の一なりありて又此城に  
りひしありありと云ふは此城の城守ありし時  
虎は此城の勢ありありと云ふは虎も角に也虎を名し  
拍つてひて懸つて墜つてありし虎を名し此城の  
今して西国を平記し讚別虎丸の懸るに好存保てし名も  
之をあり又此首大に巨房ありありて下向し時  
右岸あり虎丸長者といふ者あり今も書る所の如に  
あり今も長者の屋敷を如くし出るといふ是と屋敷  
此の城あり何の如くも虎丸長者といふ古語の如くあり  
彼事ふあり今もと遠く書つて今も虎丸の如くは是

いふ虎丸の屋敷にありしは信しやうあり今も或は  
云一條天皇延暦六年平維望藤原師任討境と云ひ維望  
遂に師任を殺して自ら信守禪を軍と云ふとあり師任  
安積の地と云ふは安積の師任といふは安積師任の  
居城ありんと云ふ人あり然し此城大なりて師任といふ  
小おの居るといふも是の或は文治の年右幕下七人の  
軍勢と云て秀衡義経と藤原のたふ前軍既に白河園に  
着陣し要列して秀衡義経を大おして今も二人あり  
は志の陣なり時秀衡方は安積を居るといふあり今  
天平十二年田村陰部初ら乃城を伊東組と云ふと近藤守

いふ事あり昔上巻に居りしと此巻のくると疑ふ人あり  
又天正十二年田村信政小浜の大内と戦ふ時形も大威が備  
あり古く上巻の城をふくむと疑ふ人あり古今同姓にて  
此城とちりし微もねむるに祖や吾の知る事と又  
一事微ともあらざるものも郷の坊今泉貞一丸世の祖  
乃信するものも原十八年と巻より好尾に投と拾めて  
乃岳山之徳若々洞む中より一房あり文字ありそ乃尾子  
乃山て唯お軍國の二字とさる城は此を法守府城の  
墟ふらん皆いふを別々人の名惜らくは下のつまを  
闕くとさる謂らく天平勝室四年陸奥國唐志多賀城

以北今輸黄金又延長八年常陸守將軍平良盛乃高弟陸  
大極名不番或ハ伊達乃高足備戸を丹國衛ハ安清加志山の  
合戦由も大將軍玉衡とつとるゆり不番ハ是等の人あり  
とやと疑ひしも蹟はしりくも不番と多賀城より此等  
金を輸とといひ良盛ハ常陸守大極とありて不番と改め  
國衛の安積乃居ら事とさるねむる行も<sup>ツヤウ</sup>確安とと記して  
名を書く性を記さ地理あり且や尾とて將軍の名と檀と  
るも謂もねむる能ふらるる將軍不府の文字ありんこと  
史系寺乃古尾乃東寺の文字ありは天王寺乃古尾しと  
天王寺と記しはふをさるる知るべし不府と稱ともある

諸國又多一他より此地の古名と玉府臺ありんことされども  
 安達内仁井田迄はと巻てふ村あり或は軍記上と巻寺と  
 り名代もありふ小杜撰とていへり然し遊人小玉府  
 臺といふもいふじりいふひてふも地ありなる事  
 上巻とのと移事あり百葉の星名と巻ていふ小玉府  
 臺てふ名と傳とのありいふ抄にと巻は貞親最後の  
 遠の地は玉府城跡なり事なりいふ物いふ地と巻定  
 して玉府臺といふ又漢書府城跡とて確乎たる事ありて  
 たりしを是なりんといふなりんといふ事なりて予うと  
 知く是又是なりいふなりんといふ事なりて予うと

従て安をよき  
抄 畧

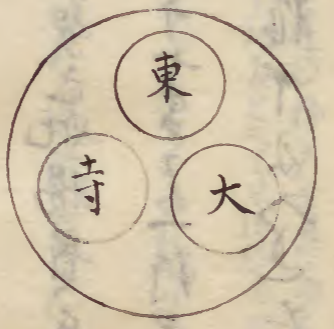
義高といふは考といふあり一語一若公考云は  
 了ぬくさぬいひてありとてさぬよ一枚云  
 倉尾ふありて鎮守府城の跡とせんいひてなるべし  
 且と長者といふとていひいふとたは富時の豪族  
 ありん名義集ふ富高大賈積財鉅萬成稱長者と  
 いらぬと參別池田は長者とと始りて世ふと  
 程の事とありいひていふ富高豪族の事とて  
 とめぬと名義集ふ人といふはさぬとん  
風俗通に年  
 者徳政事以  
 長人為長者とアルハ所謂源氏長者ナトノ類也  
 富高と名をいひていふの字源もいふていふは又ありていふなり

後て常記よりうきんとわくハ二代実録より貞觀五年  
 二月文屋釣古耳樂平呂為陸奥舟とりハ文のらと二年と  
 斗小ぢやまりーとりのと少ーとありきんさわと  
 おのり後しひさきくそ房今如室寺の什室とあると  
 過一以場ゆあり

將軍國

形ちさお  
こどく

如初こさてある古尾譜とつら又東大寺東福寺抄の  
 屋尾より



金七閣

かく小口小文字と彫たるここののと平坦なるまに文字  
 ありテ常の例ハ藝を以て是を文字より織小ぢく彦良の  
 屋より用ゆへと利ロくそとてん  
或人の文尾とるそ用ゆふ  
佛堂の介りてんといふ  
これと好古小原小岡院同裏の廢址修末の字アル所あり是  
某の記にハ本ハ本三葉所理職は信ことり例ありと好あり  
 法法有主鎮守府といひ國司の治事と玉府よりなる

例より將軍國府と稱したる事いふに如く此の如く  
らひハ一石の足受靴一はりく按とらむ頼朝小孫の享保  
十二戊申秋和列字知初の内大澤村の豊家平右衛門  
家より外移入る蓋そのまひは居或校振出候とて中  
を枚文字と彫付候と入あり尾の字カ守下を人七守  
長ヲを人九守とて文字は從五位下守右邊督兼中宮亮  
下通朝臣真備等亡妣揚貴氏慶天平十一年八月十二日  
訖歲次己卯下四十七字一行ニアリとて中見よよりて  
此尾の死者の棺中に入道たるものもあはるる候て  
いふに是はの中身引たる國衛の墓めて將軍國衛の骨

細中ふふ三蔵村といふ所の極と有りてはるは快急也  
下通氏國馬國頼夫ノ骨トアリトヨシ是又頼朝小孫也

採ありて小衛の

こゝに

伊達の跡ヲその所の底見たりと云ふ  
此地おとるは後公なるなりと云ふ

死したるを葬りし

系如くしんはるる子孫の連絡とていふはりしこと  
沙代、つらりて界進隊目の沙汰とていふはるる謂ふ者  
能くありと許すの材也と願ふとていふはるる  
とていふはるるの富豪あらうとていふはるる虎丸  
名のはよ  
と云ふ名  
好くありて通名とありたるんや、  
小衛の系譜とていふはるるを定む  
東鄙草とていふはるる虎丸甚るる古は下女とていふはるる  
一乃惡女ありとていふはるるを名とていふはるる

その所々は、いりある遠所の田畑、男田、女田、果  
樹、竹、畑、地、之、前、田、丸、と、東、夷、大、義、丸、と、い、ふ、の、由、之、ら、に  
ありて、王命、女、と、し、し、と、ゆ、り、初、意、と、為、り、討、手、に、下、り、ま、い  
白、川、郡、小、登、郷、在、田、川、村、の、院、かみ、首、奉、と、い、ふ、ら、は、對、陣、に、し、ふ  
毎、日、あ、や、し、し、之、陣、中、日、さ、し、ら、る、種、々、前、田、村、及、小、登、郷、  
と、い、ひ、或、日、自、ら、老、を、志、ら、し、し、身、死、の、ま、不、本、織、田、村、の、法、衣、  
し、天、女、の、や、く、さ、り、女、女、を、人、と、し、り、て、根、前、と、稱、り、前、田、丸、の  
所、日、也、八、顏、等、に、受、女、と、い、ふ、た、ま、ふ、女、より、法、陣、中、一、は、い  
路、ふ、き、

義鳴曰く、この姓言怪諾ありと人既ぬ知らし

同書、又、と、ら、く、昔、の、事、は、朝、日、長、者、と、い、ふ、の、姓、也、義、丸、  
公、東、夷、沙、征、伐、の、由、り、ゆ、下、向、は、あり、し、付、玉、人、と、い、ふ、幕、下、  
参、り、た、ま、女、は、計、り、ま、き、し、た、ま、女、は、旋、討、た、り、ゆ、り、と、い、ふ、  
一、鏡、丸、初、ら、の、虎、丸、長、老、の、列、業、の、地、有、り、ゆ、り、郡、山、巻、と、い、ふ、  
虎、丸、初、ら、ゆ、り、没、落、の、時、一、回、と、い、ふ、と、攻、亡、し、たり、と、い、ふ、  
義、鳴、曰、く、こ、の、姓、田、等、と、い、ふ、ゆ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、  
大、同、小、異、之、但、朝、日、長、者、と、い、ふ、は、伊、達、初、小、野、の、里、に、お、て  
今、於、彼、等、は、古、跡、あり、と、信、達、風、土、記、小、と、ゆ、り、  
大、概、記、小、い、ら、く、安、積、の、大、嶋、某、初、ら、の、田、虎、丸、と、い、ふ、及、他、  
又、し、て、佐、た、ら、ぬ、里、人、等、て、活、移、を、い、ふ、ゆ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

虎丸殿と稱せり殿館焼去後杉田へ移り居たり觀年のより  
千鶴も亦焼去して杉田より再居せりといふ虎丸の名は傳  
りし事ハ養老の頃ハ天武天皇平乃以て此の事ありき  
義晴といふハ大膽ありきハ名正史に記す  
と云々例の受給

仙道記より杉田の館主伊東を討つ事あり虎丸と云  
義晴といふハ杜撰の記あり事既よりありき  
桓虎志よりあり虎丸と建保七年の記ありき

義晴といふハ杉田の如堂寺親善と建保七年虎丸と建  
保七年の記ありき

名所記より杉田長者義家朝臣之宿をいふ事あり

義晴といふハ杉田の如堂寺親善と建保七年虎丸と建  
保七年の記ありき

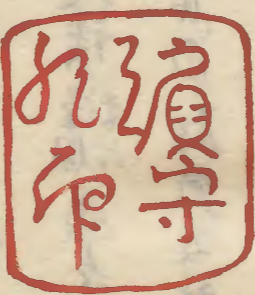
義晴といふハ杉田の如堂寺親善と建保七年虎丸と建  
保七年の記ありき

事あり且ち古中より熊本とわら事ありて大和の  
後たると疑ひありて事代の一ありて大和の  
一代は限る事あり

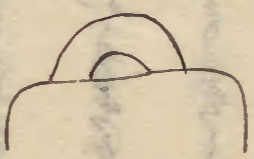


通して虎丸と号したる人なるは同名の者もふて  
千辛代のお通ふ事ある一丁千代は虎丸と稱す人  
よりいふい人名もあつて殿舎の名として記す  
秋もやうく又喜和の杉田の古跡長者家の御中より  
金の<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ

令二郷印  
一寸トスル  
大九カナリ



鈕



如し一<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ

この印字もて漢字邦字の長者の名と云ふたり  
田圃漫流に<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の長者  
あり孝隆大極國香の<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
千度高の<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
印もいひ搜す<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
等十三人賜安積臣以進軍糧也といふ事もありとふ  
いふ<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
ありん<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
ありん<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の  
ありん<sup>カ</sup>字とゆふ事ありとふ漢字邦字の

之たり也や、いふに、日記は、是より、不可得なり、其の事、  
わき事や、其の、いふに、は、た、た、事、あり、は、義、徳、は、  
後日本後紀ヲ見ルニ承和十年四月之條ニ陸奥鎮守將軍  
從五位下御春朝臣濱王云、ことら、ま、是、と、い、く、た、り、と、い、  
々、一、事、文、も、後、事、は、な、あ、く、別、後、自、の、氏、族、の、こ、も、  
後、い、ま、り、用、ひ、た、ら、は、あ、く、さ、り、  
通風、物、言、す、は、進、啓、卿、杯、の、  
法、帖、と、い、ふ、小、服、者、と、い、  
今、は、な、ふ、て、や、ま、と、後、た、ら、は、法、の、い、ら、は、は、り、た、ら、り、  
記、の、事、も、は、た、ふ、る、ふ、書、の、思、ハ、雅、茶、之、事、と、之、文、字、と、り、私、漢、の、通、例、と、也、  
且、は、虎、屯、長、者、と、い、ふ、系、列、あり、り、と、い、と、進、啓、小、あり、り、  
た、り、高、村、の、豪、家、あり、り、嫁、妻、の、因、縁、あり、遂、に、一、族、と、い、  
ふ、り、ふ、り、ん、さ、り、一、顆、の、古、印、一、枚、の、産、物、と、い、心、配、と、

文學

せんといふと、好むは、は、る、な、り、り、さ、り、ひ、て、い、と、い、

親盛

身有氏清之弟と号し最との家ありて修理左衛門親に  
昵進して諱乃字は、り、り、て親盛と、い、稱、と、い、り、と、い、  
長、子、也、 長治二年 慈明公に江守る或書といふ、親盛  
乃の秋盛も俱に孫其乃字及志保、親盛、年、若、かり、り、  
たり、と、い、て、口、方、小、は、な、り、と、い、り、り、抄、録、し、る、事、の、書、卷  
百卷、今、日、子、孫、及、傳、々、ふ、と、い、り、義、徳、は、は、り、後、葉、葉、  
は、は、り、に、  
終、了、して、可、定、記、之、類、と、い、書、と、同、し、る、事、と、い、り、  
そ、他、 其、書、の、

孫の子孫の創海と旨と神ふされ後たすし佛りされ  
人々益あるを以てあそく自己を思解とて之を面白く去  
たるものあり居世生学者の思見辯案と論じて人々あそ  
ものと同じくして活らへし又斯くしてして千序に寛永  
十二年孟陽中幹東海旅泊身如偃子綴筆とありけり  
正徳以来の事ゆへりしとて寛永十二年女筆と起して  
やうく巻とぬりたるありん  
案此書小くはたらきしに正徳元年の秋に  
書たふありしに但改し寛永六年の秋に  
初て此書初と作り初りたる書のお卷十冊とありありとそ志ありしにそ  
孟陽中幹武心士峯居士政書とありしそ名は是れ也と今自改とて中  
幹と起して同し十二年のけりハヤク巻と成ぬるなり  
○親盛の父廣盛の  
字とありありしにそ家修飾乃事起りしに玉除しし時

越後又起し大井利勝小松とそ名ありて死し親盛と  
秋感と大井勝とあり後病を以て死しそ墓今尚神所と  
ありありとそふ

希夷

岩井田氏字と子徹屠龍癩仙等の号あり俗称舍人致仁  
て四洲とゆふ下野國人なりしに享保十九年八月信業と以  
天嶽公と名するものり日初小揚らとて又日之世子傳と累  
近し宝曆八年二月十日丙申七歳或ハ六十にて死し著とて

巖嶽藏餘詩文集

四書途説 大學和解

驛燈隨筆 松島紀行

此外今知ラス隨筆ニ此人之抄東都秘書監桂山義樹君  
其父之序ありいふ巖子希夷穀於山東高才好奇  
其出之不翅六也則庸人俗士所樂守者一蹴而盡之讀  
書涉藝必極秘藏云々此詞此人乃一二と志あり足る  
る

建達

本代氏通稱定左衛門所禎虎嘯堂乃号あり宝曆六年  
七月十七日死と著と也

仙道表鑑 霞城便覽 安達信 石野信淡義

双安名勝志 重編 小松軍志奥書 此者不明けた  
一人なり

實備

津崎氏俗稱金左衛門 河江して知余を老翁と号し樂哉軒と  
遍と之降乃隊打ちり此旗乃身乃女と号し安永八年八月  
廿四日六十六歳少して死と著と也

陸奥國史 國朝旧主記 補闕本朝録 金花抄

之敬

藤澤氏字子吏名志在太致江して富訥翁と号し縣介より  
市朝乃心女將し文化二年十月九日六十四歳少して死と著と也

富翁雜話 同雜記 五雜俎考 尚書考 論語考

國語考 武教雜考 公案便議

此外福と股をけり力の若干士由りてらく此は地籍の雑活を  
みふ女千引く女正実録し編りし和漢の雑書得史し  
るるも世の事に益あり目抄し且編りて後記活録多  
く我より古をふして更又脅傷乃見ふ出り力の如く実不  
尚世施筆乃冠たるもの之惜らくの様してわく世々あり  
やあら事とといり義情もあはれ難き女終てつるの如  
そふいさむ目撃とらるる不詳とらるるなり

頼直

成田氏字伯温俗に松壽と稱し後仕して嶋友鷗と号と  
確齋又遊藝堂の法号あり初らより市正司之府尹と稱て

天保四年四月七日回集めく是と著しと云

東鑑要目類聚考 遊藝堂筆記 同次集 同修集

同二集 松藩輿志 同投古 館基考

田間漫録

曾て頼山陽井田明彦瀬原敬 松平樂翁公の儒官 小宮山楓軒 小宮の市正

新名表小書と通し交情旧識の如し類聚考の如く楽翁  
侯見治ひて手記の受りて是をふと書し待居しと云  
此字ヤ一と長く官庫に蔵とらるる一と云録世書の誤り  
書ゆりくと云て千名せらるるなり

易學

利答

上田氏 俗名孫孝是復軒と号し 殷易ヲ復スルカ 故云リトモ 近世の書に列る  
事拾有余年 没仕して老と養ひ天明八年十月十二日終  
八十歳にして死し士由ら殷易確の巻の内より殷易中無の  
祖復軒翁の事蹟と畧考ふる且顯る事莫く尚ゆして人念  
の意ふらるるを以て終焉石紀老人云復軒翁少ありし時  
始めて字彙と圖と一字の鏡と記略とを以て列きて咽ふの  
會ふ終りし字彙一初悉く喰ひ穿らぬ又好く老子を  
とみ初古の語を點け刻若くして自ら考へて中し事多  
うとて皆古人の糟粕と嘗て一々書典をたむふ力めて

古人の諸繆と計し其語の錯乱例と正誤ありきと  
りて一なる易の如き也 安反音編 のよ 平生臨望して座を  
一卦と畫し熟視沈吟しる事初ら意及ぬる事ありき  
他卦は易ふ又殷易の徳圖并多文未と敬ふありはれは  
成とての紙とての篇とての本と用心と只胸臆のうらみ  
之成とてのり著此意

殷易索考

互卦圖

此二初既に 刊行す

天吉夢

國音符考

孝子偶考

此外子孫訓誨の書多し今そ子孫及孫といへり 下とみゆ 器  
井と金鐵を記し初下及りて二初ねと一の奇人と

見しと云く人々可なりしと世論の事と云く宗考乃如  
之の抄紙の書林某之を小木板ありて之を伝ふるもの  
頗る多しと云く士田より翁乃子利愛より其術を傳へ  
奥蘊と探りしより確切と云らるりて其傳を推たる  
なりと云

數學

吉徳

磯村氏伝より文蔵と稱し初め獨習孫平より其人より  
算法と名田之好む學の力より一書と行りて磯村流と  
稱し万治元年七月 慈明公は仕なり此事あり

紙收乃を約おと經く室永の年治は一月七日十二月  
死と著しと云

算法闕疑抄 貞享元年  
上梓ス 小園物治 東鄙草

東鄙草ハ其初より相傳の述の紀行の事説根難あり  
こととも義鳴を強識の腹と云く此人萬治年中公令を  
なりて西嶽乃津泉 信に大水  
口と云ふ と府より水通二里より  
其間より星浦して庸人の企てのうらまを云く其人より其  
地と云り水勝は云く之の西よりあると云く返り  
府下より事と云く之の事と云く其勝は云く之の事と云く  
うらまの事乃今も云く水道の事と云く其事と云く其村の

水田管千波を受く実久大なる積ふらとや序に録し  
けら又傳ふ

進以死したる波色治古傳痛と一人あり名と波色

義州と會田某某小学ひて千名一を及ぶ一被襲

ゆくと一門人と稱して俗名を以て著傳を義法

書あり義法之事ありと標榜と云はれたる

後及孫傳ふ

諸禮

實良

星氏俗に忠多傳と稱ふ是則武歴小傳也庵不載星也味安

つ子味庵代、今津芦名郡味庵舎津小阿一時小笠原大膳方史

長時と己つ子傳ふ系一也一方一長時初傳一忠志と記して

子家の禮式秘決乃一つ子一味庵小授らる味庵のら蒲生忠郷初伝に

小笠原秀政小見系一長時より授けり一秘決者一之り多しとヤセ一うとも

取らうてそより果さる内秀政は父子之坂の傳めて討死あり一六子書ハそより

味庵のら寛永十二年 條波公女はなり 承安四年六月

波は一承應二年十月十一日死一子孫今在傳一なりて千書と

段四學

説夫

遠藤氏俗稱雲海寛延元年十二月医業と以て



大田公及仕はなら著と交

麻疹一吟 刊本

其病乃天のたふしを今初下り書録は書もたふし  
世よりたふしとらふり

伯敬

中野氏元興と通号は 雄峯公初刻医より著は處

醫言漫録 刊本

俳人

尚茂

日野氏平五郎と通号は元禄三年あらうて番の職より

通輝と号し風流のたふしは事いはして俳諧と好して文章は  
稱し百花堂と區は著と交

花蔭 ハチアツミ

こゝ白炭乃忠知梅翁季吟嵐名其角と始として我々封内  
俳人又と自ら乃白と撰じて元禄八年二月と自ら白の中  
目とらうり

若菜

若菜はむ初女や高踏うり

白魚

白魚や渚あきうり京乃ら

蝶

雨の日や一枚のふらふら蝶の羽

動のうらあふぬ方をあつとつる

花乃ら幕の掛るも傍に花

人と花みる我と手あはれくんとくやうて

うはさひの梅のあやむじまのるが

新樹

樹の因又ふく道の子たら若葉外

百合

袖もして深るく好く百合の葉

早苗

日あわてを投ふ早苗のまこらや

納涼

鼻をうらあふるまてこいひ川邊が

封内の人々

二本松

鑑水

菟耳

梅月

倫矣

一八

如毛

包抄

泉壺

八角

赤林

権臣

文下

番水

車牛

一和子

永糸

白蟻

林元

彼矣

九雲

友春

春牛

蟻齧

蝶夕

一雨

其柳

東水

芳名

文八

我矣

梅流

麿言

如醉

之也

玉泉

庵月私氏

少加

文下妻

初山園夕

名忘

日和田等苦

日出山一葉

○此卷之四季上下各卷一なるものごとく三冊の二冊と

なりていま下巻と云ふこと

好畫

敏義

信田氏字龜史信是古傳と秘傳ははのり樂坊と号たり

大目より初代と稱く文化年中七十余よりして死す

初居云處夫有画癖嘗直藩府因見画師蛇足山水因

展卷數四嘆曰真名手也已就寢夜忽起採燭觀之不復覺

達且云、今時稀ニ手澤をなと画工宿涯下野人評して

大我重乃氣韻ありと云り

新居の内及外人改事と徳の力改事と云ふを多し

其後其地同書又百載教授人其のくふさ

武技

高就 或ハ後ニ傳燈ト  
改メテト云

大橋氏常の名と長藏と有り

此の人なりや或ハ尾羽の唐之  
といふなり是と大橋長藏の傳て

書名あり今も江都に於て大橋流と稱はる此人の祖と云ふ説あり書に  
くく一子格氣韻會を記しきりしと射屋小藏と云て名實を云ふなり

弓射を事と好みく稽名武成と云ふ宮崎権七郎又学弓の

後中を傳る者として師として皆共く其の弟子にあり

とく年々其の女を娶とりしは伊豫の山守齋生秀行 初名深  
の誠

女石を以て其百名の福治と云りしと云んとして寛永年中

三月よりく京師より蓮花王院より教子傳の書と射通

多射をせむ大射と稱して其名を下にして是なり 是皆其  
多射の

其射と云。武藝小傳二曰大橋長藏其之  
二十六人謂之堂前大射手或称京一云 齋生氏の亡後ハ其子

出く射術を教ふる事と業としてありと云ふ

慈明公を其名と云りしと云りし彼小つと云ふ其の

修りしとく其意二年四月十日より其梅田なるは館の

内ふ石を以て十のり力考修乃小寸力的擣て其技と誠

多しと云ふ然從容として是と射多し甲を以てして

乙を以て甲を射ありと云り 公行ありたるは其の

神くは其の修たる其意其流なることなりぬひて武庫

を秘わたりし其可 其可  
の人 といふその射たる其流と云りて

つをせりふ いふ有堂より虎朝鮮みわく  
と公小婿ら道一とのなり 高就つやくお見てこそ  
二ある宝もくとの但田至蒲生氏の持より花婿の  
弓と大弓の似あり蓋を花可花刺もあふるわしと  
中より急波着てあふとあつし此弓比月居してあつし  
人も強よめとあつしつし今足下してあつし  
勢ありしとおふとあつしつし今足下してあつし  
くこの強よめとあつしつし今足下してあつし  
うあつしつし今足下してあつし  
様ありしとあつしつし今足下してあつし  
めりしとあつしつし今足下してあつし

おふして五百石の福ありて遂に花婿もあつし  
おふして法士を門におふとあつしつし今足下してあつし  
法板と射しつし今足下してあつし  
くわい 公は公よりつし今足下してあつし  
事ありつし今足下してあつし  
候とん手羽のあつしつし今足下してあつし  
射くつし今足下してあつし  
弓とりて射ありつし今足下してあつし  
あつしつし今足下してあつし  
つし今足下してあつし  
廿二日病ありつし今足下してあつし

或はあつしつし今足下してあつし  
青田日んたつし今足下してあつし

妙法蓮華寺女葬王日健と号し子ぶるぬ家地あり傳へし  
とらく墓の例日名有りし日健の二字と有りて檀に  
門人おく墓たしりてそありも忘る事ありしと年あり  
うるをくもせぬありて遂に墓と名をりし  
天明二年あふ人の墓碑はくりし時石よりわきくそ石と  
碑よりありたり墓を名知りしはありしとと  
ありし  
其事蹟の埋蔵せん事とありし徳信三吉氏同志のくを合  
て石碑となんといひ碑法と探たりとく女界碑といひ

貞家

村越氏之を史と稱しは弓箭の事と司り貞享元年十二月  
廿一日死に後乃の自あるに或時浦前村平伊藤と伝へし地

今くは是を地を地地是は家史的と云作付の石蓮の  
は家史的の同好しとの有しゆり云作付へてやの石蓮は  
は歴の事一幸ひ十日ハ村越之を史は依は年月このを  
と指出る事弓矢は子及合のと云用ひは指しとく  
中一ゆを史取引はりていつし弱く拙を自ら  
合不中の射料の弓矢を家史的年月人とせし  
よせの事モワコ指と名付ける後弓村系は是にて射し  
流石浦前のは家中も歴と流しゆり久を史と云類の  
後弓はて矢の麓ハ筒所ゆと云は右のモワコ指矢  
ゆの家中小不わく事はなむる不調法あり田舎侍の

有平河山 雄藩  
兼治

義晴いつらく番棒と云ふ所  
或ある所ありしとて其家の  
古と入りて違ひたらむ  
少しは控心事あり  
字して番棒と名付ありと  
今門もく蝦蟇と村たり  
三川

重明

根来氏八九郎と稱ひ伊東忠也の門下  
根来氏八九郎と稱ひ伊東忠也の門下

達人武藝小治忠也乃傳有根来八九郎重明者忠雄之  
弟而同從忠也得其宗始仕二本松侍從丹羽長次後致仕  
改名独身大鳴天和二壬戌年八月十八日享年七十有八  
而死云々とある是くさくさ藩の書に之をたすは重明ハ  
累代乃先祖紀伊守佐人又と右系重賢といひ是と平右衛門  
忠雄弟とと右馬守某 將軍家麾下  
の与力なり といひ是と伊東忠也小就て學ぶ  
事幸と幸のいふ先師の印可悉く授らるるも  
右左衛門 家之云 忠雄のいふ重明のまは沙路をいへり  
作下されしは幾程ありと尋ねさせりいふに壬午年止り  
此後忠雄と甲府殿と右左と云ふ重明と云治之幸 九月

慈明公は系々公の師範として法と徳をとりしるは信  
敬懐くし思遇をふんれり切て重明寛文三年の以後は  
て再び江戸に居り住むと云ふ所の如く師範と云ふは月俸數多  
けりぬは時名をも改て福身と号し名譽もしくさかんや  
多復と云くは少くは修練の功積りのりてを  
取くを形と愛し古流と銘れせんやう且一家の刀法を  
草創して天心福明流と作の流と云ふ名も今も流傳別々ありて  
其名と由來を詳し古今指歩の人ありは年積て三十一歳  
天和二年八月十八日病歿なりて享年六十九歳重明  
其流の業と傳へて亀井龜右衛門と云て之世傳之之流と云ふ

あり貞享二年十月に業と云 眞國公は系々正徳  
三年十二月十九日六十二歳歿すなりとありは重明の  
慈明公は系々子の重明と 眞國院長次と云は  
や一は武藝山流と混して誤りなりは教代のはら根本  
傳右衛門の系々門馬市右衛門と云ひは名あり藩小はて  
流士流ありありて是程し江戸にも多く相川右衛門と  
更名いふ人もあり一対面流の流法と云法し子術と  
学んしと能くしれは志移ひしりしりて毎日刀場のあり  
て撃刀の事と云く事一月余り切て傳右衛門の志の  
懇切なりと云ふは流傳の事と云ひは市右衛門と云ふ



彼の細身粉骨是と云ふ事案あまて小左力の術と授けらる  
市右馬の妻と云りて我の親法を是めく是よりぬるゝと云  
やゝと云りてと書ハ飯田茂右馬の母を以て即日流の能書  
しと云りて世人の如く永澤源右馬のしと云りてのと流傳は  
ありり源右馬のと殺害しそ身も腹切て死にそ時の遺状  
今程根葉の秘法と云りてと云りてと云りてと云りてと云りて  
皇死初階とは流傳は安全にそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
の之禮に流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は

比る色もくはふと勝中のみ定方八町同公松平を破り敵は組  
永澤源右馬と云り流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
者もては流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
と云ふは流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
所用之は流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
馬切しと云ひありりやゆと中にお合ふや私ハ小左力拵と  
はは時振とありとありとありとありとありとありとありとあり  
お右ハ大振指を事お進まうゆを一足と云りてゆゆの向の  
左力のと云ひと流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳はそ流傳は  
左の口服も一切進めり退さゆゆと云りて



おろろろろりしてはくつ町くわのたを指す

おのりうらなうも嵐ふらふを眺むとさうさう首うりさうと

澄て入るは法の川のうはくむわらひも最とあらうさうと

生もふ生死も死若も死悪も死

生死も只空花水月のや一水可尋水可觀歎上成併と

お切て可也

右に法合具るうら町奉約とよの書舟具の生を不定と後田

飛古鳥の杯遠別は用人の芽子もは生れらる富を一現見と

作るは使てまふのまふと出やるまふとまふわら文はつり

はあするは出し侍のたはまふわらわら若ふとふは御と

私房村の松子小を刀と名也掛は自房の松を名也心也  
まふの松燈籠と

八月十八日

門馬市在り  
相川新在り

傳右馬の極

名ハ保去宗曆四年前と此天明七年ニ在リ  
此文ハ廿人の付ことり

辰一を極

系ハ保去宗の保去の足ニ保去とあり  
あり一子初也

八之を極

名ハ保去宗の保去の足ニ保去とあり  
あり一子初也

其

猪目氏小七郎と稱以或書小云小七郎ハ猪目五治在馬ノ系也

子之と居右馬つと之ハ陸奥國仙臺の人移て松府不任馬と叙  
とら事とあり業とハ山七郎といひけるなり業と傳志学  
の比ふハ今津日任せり此々の名譽曰方ハ如行昔編年史  
と云らんハ物々其義と極め又高村馭法の達人ありと云ハ遂迄  
と編年史を号と云と云ハ行て逸事ハ事年と云ハ一ハ  
遂日不測の妙法を伝と云ハ名譽曰津日隠り一ありまの  
多一ありハ 泰聖公の仕付下位道一ハ云より妙ハ隠れ一あり  
行と云ハ思案妙ハありハハ終日月夜多ありて過ハハ長男  
今泉丈舟貞系と云ハ今泉 利庵 一ありと云ハ義傳と  
らくハ人死ハ隠て卒然と起と云ハ子の貞系と云ハ自徳と

と云ハ世を傳と云ハと云ハ引て貞系是ハ一ありと云ハ一息  
絶一と云ハ彼の 京都老宿の石階と云ハ一ありと云ハ馭法の養と  
云ハ一ありと云ハハ源右馬つ 丹羽氏 といハハ一人の弟子  
あり一と云ハハ源右馬つ 一書 或ハ書ふと云ハ一ありと云ハ  
ハ源右馬つ源昌明と云ハ 左史 重明ハ二男ハ貞享四年  
十月新ハ玉鷹と云ハ 中 宝永元年十二月長柄の守約に  
あり伊東院檢術法師範と云ハ 作 あり享保元年二月  
先降ハ源将と云ハ一あり同十七年源有て職と奪と云ハ  
寛保二年五月十九日七十七歳ありて死と云ハ人武術一  
達一ハ一ありハ馭法と云ハ一ありハ名譽せハ隠れ

あうりき 巖松公東廠山の防大 作敵とさるし時  
山のさうとあふはり 今もは馬とせせりりる  
塞りて通とさるし事けししは時昌明をさる  
北甲防大の官吏大軍場 若よし作たぬ昌明とさる  
兼と一と勢の中と推かくさむねふ二枚橋山丁焼落ぬ  
さるし人のと自とさるし一敵とさるしと先述し官  
吏とさるしと若りたりと官吏の先述ふ二枚橋焼落  
ぬとさるしとさるしと先述とさるしと馬とさるし  
先述たりとさるしとさるしと先述とさるしと馬とさるし  
は身と違しと姓名と誰とさるしと同とさるしと昌明の姓名と

昌明の姓名と誰とさるしと同とさるしと昌明の姓名と

義晴とさるしと猪目氏と 春彦公の山付古江り  
さるしと人さるしと 巖松公春彦公の山付 北山付さるし  
とさるしとさるしと山付の敷法と違やと事とさるし  
はさるしと猪目氏のさるしとさるしと口碑のあやまり  
とさるしと考ふと昌明寛保二年七十七歳と死  
とさるしと寛文九年の生と 春彦公の山付  
さるしと元禄十四年昌明二十歳とのさるしとのさるしと  
りら猪目氏と世と同一とさるしとさるしとさるしと敷法  
とさるしとさるしと猪目氏のさるしとさるしとさるしと

たつた始より身子のゆくせよいふわらう  
案三昌明  
元禄二年

二十一才也ては小姓女石出され同は年より六年迄は帳番の事と云はる人外り  
さねい布文の事ありしは、者ねをば後身して左初より一付の事あり  
別世二段ふありしありとくみは共より二年た  
さきの内より事あるあり実た世の名取と云ふ

相生集卷之十六終

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

ト

